

Ⅱ. 虫 害 防 除

ス ジ キ リ ヨ ト ウ

I 試験実施時期および試験規模等

1. 試験実施時期

成虫は5月・7月・9月頃の年3回発生する。秋期が高温の場合は更にもう1回発生する場合もある。幼虫の発生はその山の間である6月・8月・9月頃である。幼虫に対する試験は発生の多くなる第2・3世代の若～中令幼虫を対象に実施するのが望ましい。

2. 試験地の設定と準備

ゴルフ場の芝地ではラフのノシバはあまり手入れをしないので、スジキリヨトウの発生が多い。また芝地に植えてある樹木の葉に産卵することも多いので、そのような樹木の周りに集中する場合がある。試験圃場は葉の先端部にみられる孵化直後の幼虫の被害などに注意して、若～中令幼虫が多く均等に分布している場所を選んで設定する。

3. 試験規模と区の配置

(1) 1区の面積

本種は中令以上になると移動量が大きくなるので、1区の面積は少なくとも9～16m²（3mまたは4m平方）程度が望ましい。

(2) 試験区の構成と配置

原則として3区（連制）乱塊法配置とする。やむを得ず試験区が分離する場合は、1連の試験区ごとに分離して配置する。

Ⅱ 薬剤の施用方法

1. 施用時期

若～中令幼虫が多い時期におこなうことが望ましい。一般的に、散布後降雨があると防除効果が減るので、なるべく晴天の時を選ぶ。

2. 施用方法

液剤は、芝草の表面にジョロまたは加圧噴霧器で所定の濃度・散布量で散布する。粒剤は、手蒔きにより散粒後、液剤区と等量の水をまく。散布量が少ない場合は、砂で増量して散粒する。施用回数は原則として1回とする。

3. 対照薬剤

既登録薬剤のなかからそれぞれの地域の慣行を勘案して薬剤を選定する。

Ⅲ 調査方法

1. 調査回数・調査方法

薬剤の性質によって異なるが、一般には散布前・散布後3日目及び7日目の3回、各区とも30cm×30cmの芝地を任意に3ヶ所ずつ抽出して、その中に生息する生虫数を調査する。必要に応じてそれ以後の調査を加える。

2. 表示方法

生虫数については補正密度指数を求め、併せて表示する。その計算は次式による。

$$\text{補正密度指数} = \frac{Ta \times Cb}{Tb \times Ca} \times 100$$

散布直前調査を行わなかった場合は、密度指数によって示す。その計算は次式による。

$$\text{密度指数} = \frac{Ta}{Ca} \times 100$$

Ta：処理区の処理後生息密度

Tb：処理区の処理前生息密度

Ca：無処理区の処理後生息密度

Cb：無処理区の処理前生息密度

Ⅳ その他

気象条件（降雨など）土壌の種類等を記録しておく。

シ バ ツ ト ガ

I 試験実施時期および試験規模等

1. 試験実施時期

成虫は5月・7月・9月頃の年3回発生する。幼虫の発生はその山の間である6月・8月・9月頃である。幼虫に対する試験は発生が多くなる第2・3世代の若～中令幼虫を対象に実施するのが望ましい。成虫は夜間地上に出て飛翔するので、発生の時期と場所を知ることができる。

2. 試験地の設定と準備

本種の被害は、草丈の長い芝地では発見されにくい。そのため、コライシバやベントグラスのナーセリーやフェアウェイなどの黄変した芝地をホールカッターで掘りとり、生息を事前調査してから圃場を設定する。ノシバの場合は芝草の上部をあらかじめ刈り取ってから事前調査する。

3. 試験規模と区の配置

(1) 1区の面積

1区の面積は少なくとも2~4m² (2×1mまたは2m平方)程度が望ましい。

(2) 試験区の構成と配置

原則として3区(連制)乱塊法配置とする。やむを得ず試験区が分離する場合は、1連の試験区ごとに分離して配置する。

II 薬剤の施用方法

1. 施用時期

若~中令幼虫が多い時期におこなうことが望ましい。被害は急速に進行するので適期を逃さないよう十分注意する。一般的に、散布後降雨があると防除効果が減るので、なるべく晴天の時を選ぶ。

2. 施用方法

液剤は、芝草の表面にジョロまたは加圧噴霧器で所定の濃度・散布量で散布する。粒剤は、手蒔きにより散粒後、液剤区と等量の水をまく。散布量が少ない場合は、砂で増量して散粒する。施用回数は原則として1回とする。

3. 対照薬剤

既登録薬剤のなかからそれぞれの地域の慣行を勘案して薬剤を選定する。

III 調査方法

1. 調査回数・調査方法

薬剤の性質によって異なるが、一般には散布前・散布後3日目及び7日目の3回、各区ともホールカッターで区内の芝草地を任意に3~5ヶ所ずつ抽出して、その中に生息する生虫数を調査する。幼虫は植物や土粒で巣を作り、その中に生息しているので丁寧に調査する。必要に応じてそれ以後の調査を加える。

2. 表示方法

スジキリヨトウに準じて行う。

IV その他

気象条件(降雨など)土壌の種類等を記録しておく。

コガネムシ類幼虫

I 試験実施時期および試験規模等

1. 試験実施時期

芝草を加害するコガネムシ類は(A)成虫・幼虫ともに芝地で生息するものと(B)成虫は芝草を摂食せず、

幼虫が芝草を摂食するものに大別される。コガネムシ類の幼虫と成虫の圃場試験を行う場合は(A)に属するコガネムシ類を対象とするほうが至便である。

(A) ウスチャコガネ・チビサクラコガネ・オオサカスジコガネ・ヒラタアオコガネ・セマダラコガネ

(B) マメコガネ・ドウガネブイブイ・ヒメコガネ・チャイロコガネ・ヒメアシナガコガネ

(A)に属するコガネムシ類は、成虫出現の最盛期から、若令幼虫の発生する時期を推定することができる。東海地方では、①ウスチャコガネ ②チビサクラコガネ・オオサカスジコガネ ③セマダラコガネ成虫の地上出現の最盛期はそれぞれ ①4月下旬～5月上旬 ②6月中旬～7月上旬 ③7月中旬～下旬であるので、若令幼虫発生時期は、それぞれ ①6月上旬～7月上旬 ②7月下旬～8月中旬 ③7月下旬～8月中旬と考えられる。

一般的に降雨の多い場合は地温が上がらず経過は遅れるが、高温乾燥のときは早くなる。予備調査で卵粒が多くみられるときは試験を遅らせるとか、老令幼虫が多い場合はそのことを考慮に入れて弾力的に試験を行うことが望ましい。

2. 試験地の設定と準備

対象となる種名を明らかにして、その幼虫が多く生息している芝草地を選定する。他種のコガネムシ類が混在しない場所が望ましい。また、若齢で同じ令期の幼虫が均等に生息している場所が望ましい。

比較的広い面積の芝地を掘り起こして調査するため、ゴルフ場のナーセリーやラフの芝草地で実施することが望ましい。

耕土が浅い土壌や地下水位が高い場所では防除効果を示す数値のばらつきは比較的小さいが、耕土の深い砂壤土ではばらつきは大きい。傾斜地はできるだけ避け、平坦な場所を選定する。

(B)に属するコガネムシ類幼虫を対象とする場合は、成虫の餌植物が分布する場所との関係に留意する。

3. 試験規模と区の配置

(1) 1区の面積

1区の面積は少なくとも9～16m² (3または4m平方) 程度が望ましい。

(2) 試験区の構成と配置

原則として3区(連制)乱塊法配置とする。やむを得ず試験区が分離する場合は、1連の試験区ごとに分離して配置する。

II 薬剤の施用方法

1. 施用時期

若令幼虫が主体の時期におこなうことが望ましい。一般的に、散布後降雨があると防除効果が減るので、なるべく晴天の時を選ぶ。

2. 施用方法

液剤は、芝草の表面にジョロまたは加圧噴霧器で所定の濃度・散布量で散布する。粒剤は、手蒔きにより散粒後、液剤区と等量の水をまく。散布量が少ない場合は、砂で増量して散粒する。施用回数は原則として1回とする。

3. 対照薬剤

既登録薬剤のなかからそれぞれの地域の慣行を勘案して薬剤を選定する。

Ⅲ 調査方法

1. 調査回数・調査方法

薬剤の性質によって異なるが、一般には散布前・散布後 10 日目及び 20 日目の 3 回、各区とも 40×40×15 cm の芝草地を、または大型のホールカッター（直径 12～15 cm）で任意に 3 ケ所ずつ抽出して、その中に生息する生虫数を調査する。しかし 3 回の調査では芝地の損耗が激しく、また試験区数の多い場合は特に目立つので、このような場合は、散布前・散布後 20 日目の 2 回調査に止めることもやむを得ない。

2. 表示方法

スジキリヨトウに準じて行う。

Ⅳ その他

気象条件（降雨など）土壌の種類等を記録しておく。

コガネムシ類成虫

I 防除試験の方針

前項の(A)に属するコガネムシ類成虫の防除は、成虫が地上に出現する時期に薬剤を散布するのであるが、成虫の飛翔範囲が広いと多くの試験区を設定することができない。また、薬剤を散布すれば、成虫は芝地に潜入するので、防除効果の調査が困難である。また、(B)に属する成虫の場合は、成虫が餌植物に飛来して摂食しているときに薬剤を散布するのであるが、成虫は飛散するので試験区の設置や防除効果の調査が困難である。

このためモデル実験を行いその資料に基づいて防除効果を判定しなくてはならない。

II 薬剤の施用方法

1. 使用器具

薬剤散布用容器は金網製円筒形容器などを用いるとよい。

2. 試験規模

1 区当たりの収容頭数は 5～10 頭程度で、3～5 反復とする。

3. 施用方法

薬剤散布用容器に収容し、加圧噴霧器で所定濃度の薬液を虫体が十分濡れるように散布する。

4. 対照薬剤

既登録薬剤のなかからそれぞれの地域の慣行を勘案して薬剤を選定する。

5. 飼育管理

(A)に属する成虫は底に芝草を植えた飼育容器に入れて室温で飼育する。

(B)に属する成虫は飼育容器に食餌植物の葉を入れて、全く同様に行えばよいが、芝が対象とならないので芝草の登録データとしては使用できない。

Ⅲ 調査方法

1. 調査回数・調査方法

薬剤散布後毎日死亡虫の調査を行う。調査期間は原則として3～5日間とするが、必要に応じて更に調査する。

2. 生死の判定

健常個体を生とし、歩行異常のものも死とする。但し最終調査時まで異常はあるが生存しているものが多い場合はその旨を記載し、その後の産卵能力等まで調査することが望ましい。

3. 表示方法

死亡率を求め、併せて表示する。

シバオサゾウムシ

I 試験実施時期および試験規模等

1. 試験実施時期

本種は侵入害虫であり、日本での発生様相は複雑となっている。越冬は成虫態・幼虫態ともにあり、冬場を除いて常に各ステージがサッチから根群の間で活動している。

2. 試験地の設定と準備

本種の成虫による被害は、草丈の長いラフに多いので、ノシバの直立茎の基部に生ずる産卵孔や芯枯れ茎の発生に注意して試験圃場を配置する。

また、幼虫の場合は比較的土壌水分の高い場所を好み、近年はフェアウェイに散水設備を設置していることが多いことから、フェアウェイとラフの境目で被害のある場所に試験区を設置する。

3. 試験規模と区の配置

(1) 1区の面積

1区の面積は少なくとも幼虫では2～4m² (2×1m または 2m 平方)、成虫では9～16m² (3×3m または 4×4m 平方) 程度が望ましい。

(2) 試験区の構成と配置

原則として3区(連制)乱塊法配置とする。やむを得ず試験区が分離する場合は、1連の試験区ごとに分離して配置する。

II 薬剤の施用方法

1. 施用時期

一般的に、散布後降雨があると防除効果が減るので、なるべく晴天の時を選ぶ。なお、成虫を対象とする場合は、夜間に交尾のために芝草上に出現するので、夕方に薬剤処理するのが望ましい。

2. 施用方法

液剤は、芝草の表面にジョロまたは加圧噴霧器で所定の濃度・散布量で散布する。粒剤は、手蒔きにより散粒後、液剤区と等量の水をまく。散布量が少ない場合は、砂で増量して散粒する。施用回数は原則として1回とする。

3. 対照薬剤

既登録薬剤のなかからそれぞれの地域の慣行を勘案して薬剤を選定する。

III 調査方法

1. 調査回数・調査方法

薬剤の性質によって異なるが、一般には散布前・散布後10日目及び20日目の3回、①幼虫試験では、各区20×20×15cmの芝草地を、また大型のホールカッター（ソッドカッター）で任意に3ヶ所ずつ抽出して、その中に生息する生虫数を調査する。②成虫試験では、各区直径30cm×高さ15cmの塩化ビニール環を芝草地に5cm程埋め、これを任意に3ヶ所設置する。上部から多量の水を冠水し、約1時間放置する。成虫は苦しくなって水面に現われる。この時の生存虫数を調査する。また、夜間調査では、たて1m×よこ1mの木枠を芝草上に任意に3ヶ所設置し、木枠内に出現した生存虫数を調査する。6～9月頃では夜間8時～10時頃が最適である。

しかし3回の調査では芝地の損耗が激しく、また試験区数の多い場合は特に目立つので、このような場合は、散布前・散布後20日目の2回調査に止めることもやむを得ない。

2. 表示方法

スジキリヨトウに準じて行う。

IV その他

気象条件（降雨など）土壌の種類等を記録しておく。

チガヤシロオカイガラムシ

I 試験実施時期および試験規模等

1. 試験実施時期

本種は年1～2回の世代を経過する。防除適期は若令幼虫期であり、この時期を過ぎると芝草に定着した後

分泌したろう物質で体の外面が覆われるので、防除は困難である。1令幼虫の出現期は6~7月と8~9月頃であるが、この頃葉に出現する1令幼虫の発見につとめるか、もしくは事前に採集しておいた雌成虫を試験管等に入れなるべく外気温と同等の場所で保持し、幼虫の孵化を確認して実施時期を決めるのが望ましい。

2. 試験地の設定と準備

本種は乾燥した場所を好み、高温乾燥時に被害も目立つようになる。排水のよいグリーン・ティー・バンカー周辺やラフの傾斜地に多くみられる。成虫はほふく茎や直立茎の分枝するところに見いだされるので、事前にホールカッターで掘りとり調査を行いなるべく平坦なところに試験圃場を配置する。

3. 試験規模と区の配置

(1) 1区の面積

1区の面積は少なくとも2~4m² (2×1mまたは2m平方)程度が望ましい。

(2) 試験区の構成と配置

原則として3区(連制)乱塊法配置とする。やむを得ず試験区が分離する場合は、1連の試験区ごとに分離して配置する。

II 薬剤の施用方法

1. 施用時期

一般的に、散布後降雨があると防除効果が減るので、なるべく晴天の時を選ぶ。

2. 施用方法

液剤は、芝草の表面にジョロまたは加圧噴霧器で所定の濃度・散布量で散布する。粒剤は、手蒔きにより散粒後、液剤区と等量の水をまく。散布量が少ない場合は、砂で増量して散粒する。施用回数は原則として1回とする。

3. 対照薬剤

既登録薬剤のなかからそれぞれの地域の慣行を勘案して薬剤を選定する。

III 調査方法

1. 調査回数・調査方法

散布前・散布後40~50日目の2回、各区ともホールカッターで芝草地を任意に3~5ヶ所ずつ抽出して、その中に生息する生虫数を調査する。成虫は白色のロウ物質で覆われていて脱落しやすく、またすす病の寄生を受けて黒色を帯びた灰白色をしているので、注意する必要がある。散布後の調査に際しては、防除対象の幼虫が成虫にまで生育している時期でないと、効果の確認が行いにくいいため、事前調査を実施して処理区外で成虫が発生していることを確認することが望ましい。

2. 表示方法

スジキリヨトウに準じて行う。

IV その他

気象条件(降雨など)土壌の種類等を記録しておく。

ミミズ（糞塚形成阻害）

I 試験実施時期および試験規模等

1. 試験実施時期

日本産のミミズ類は、フトミミズ・ツリミミズ・ジュズイミミズ・ヒモミミズの4科に属する。芝草地で糞塚を形成して被害を与えるのは、主にフトミミズ科のことが多い。ミミズは夜間、特に日没直後や夜明け直前に盛んに活動し、地上にある枯れ葉や枯れ草や土粒を呑み込んで摂食活動をする。その際、地表に糞を排出して芝草地に糞塚を形成する。この被害はミミズの活動期である4～10月の期間に起こるが、とりわけ春先から梅雨期までと、9～10月の秋期に多い。従って、このような被害の多い時期に試験を実施することが望ましい。

2. 試験地の設定と準備

特に排水の悪い芝草地に多いので、そのようなところに試験圃場を配置する。

3. 試験規模と区の配置

(1) 1区の面積

1区の面積は少なくとも9m²（3m平方）程度が望ましい。

(2) 試験区の構成と配置

原則として3区（連制）乱塊法配置とする。やむを得ず試験区が分離する場合は、1連の試験区ごとに分離して配置する。

II 薬剤の施用方法

1. 施用時期

夜間に活動をするので、糞塚の形成が盛んな夕方に処理をすることが望ましい。一般的に、散布後降雨があると防除効果が減るので、なるべく晴天の時を選ぶ。

2. 施用方法

液剤は、芝草の表面にジョロまたは加圧噴霧器で所定の濃度・散布量で散布する。粒剤は、手蒔きにより散粒後、液剤区と等量の水をまく。散布量が少ない場合は、砂で増量して散粒する。施用回数は原則として1回とする。

3. 対照薬剤

既登録薬剤のなかからそれぞれの地域の慣行を勘案して薬剤を選定する。

III 調査方法

1. 調査回数・調査方法

薬剤の性質によって異なるが、散布前・散布後7日目および14日目の3回、各区とも糞塚数を調査する。

2. 表示方法

スジキリヨトウに準じて行う。

IV その他

気象条件（降雨など）土壌の種類等を記録しておく。

ネキリムシ類

I 試験実施時期および試験規模等

1. 試験実施時期

芝草地のネキリムシ類の被害はタマナヤガとカブラヤガであるが、主体はタマナヤガであり、後者はどちらかという畑作物に多い。2種の幼虫は似るが、タマナヤガ幼虫は体型が細長く、行動が活発であるほか皮膚の表面をルーペ等で拡大して観察すると、大小の顆粒をそなえているので区別は比較的容易である。両種とも年2～3回の発生であり、誘殺灯によりその消長を調査することができるが、それほど多く誘殺されない。西洋芝のグリーン・ティー・ナーセリーで幼虫による被害の早期発見が重要であるので発生量の多い2化期の若令幼虫を対象に試験を実施するのが望ましい。

2. 試験地の設定と準備

両種ともに洋芝を好んで食害し、特にベントグラスにおける被害が大きく、夜間地際に這いだし、円形状に芝草を食害するので、このような被害の多いところに試験区を配置する。

3. 試験規模と区の配置

(1) 1区の面積

1区の面積は少なくとも2～10m²（2×1m～2×5m）程度が望ましい。

(2) 試験区の構成と配置

原則として3区（連制）乱塊法配置とする。やむを得ず試験区が分離する場合は、1連の試験区ごとに分離して配置する。

II 薬剤の施用方法

1. 施用時期

一般的に、散布後降雨があると防除効果が減るので、なるべく晴天の時を選ぶ。

2. 施用方法

液剤は、芝草の表面にジョロまたは加圧噴霧器で所定の濃度・散布量で散布する。粒剤は、手蒔きにより散粒後、液剤区と等量の水をまく。散布量が少ない場合は、砂で増量して散粒する。施用回数は原則として1回とする。

3. 対照薬剤

既登録薬剤のなかからそれぞれの地域の慣行を勘案して薬剤を選定する。

Ⅲ 調査方法

1. 調査回数・調査方法

薬剤の性質によって異なるが、散布前・散布後7日目および14日目の3回、幼虫の食害痕（生息孔）をマークしてその数を調査する。必要に応じてそれ以後の調査を加える。

2. 表示方法

スジキリヨトウに準じて行う。

Ⅳ その他

気象条件（降雨など）土壌の種類等を記録しておく。

スナコバナネナガカメムシ

I 試験実施時期および試験規模等

1. 試験実施時期

本種は年1世代で主として成虫・一部幼虫態で土壌中で越冬する。越冬した成虫は4月下旬頃から活動を始め、幼虫が5月下旬頃から増加する。新成虫は8月上旬から出始めそのまま越冬する。本種は土壌中に生息するため、その防除はかなり困難である。試験は成虫が交尾のため地際に生息する5月上旬と新成虫の密度が高い9月中旬に実施するのが望ましい。

2. 試験地の設定と準備

本種による芝草の被害の特徴は、その根部を吸害されるため根が消失して地下茎のみになるので、土壌の流出が顕著である。砂土や砂壤土で乾燥する傾斜の法面をもつ芝のラフやバンカー周りに被害が出やすいので、このような場所に試験区を配置する。

3. 試験規模と区の配置

(1) 1区の面積

1区の面積は少なくとも2~4m²（2×1mまたは2m平方）程度が望ましい。

(2) 試験区の構成と配置

原則として3区（連制）乱塊法配置とする。やむを得ず試験区が分離する場合は、1連の試験区ごとに分離して配置する。

Ⅱ 薬剤の施用方法

1. 施用時期

一般的に、散布後降雨があると防除効果が減るので、なるべく晴天の時を選ぶ。

2. 施用方法

液剤は、芝草の表面にジョロまたは加圧噴霧器で所定の濃度・散布量で散布する。粒剤は、手蒔きにより散粒後、液剤区と等量の水をまく。散布量が少ない場合は、砂で増量して散粒する。施用回数は原則として1回とする。

3. 対照薬剤

既登録薬剤のなかからそれぞれの地域の慣行を勘案して薬剤を選定する。

Ⅲ 調査方法

1. 調査回数・調査方法

薬剤の性質によって異なるが、一般には散布前・散布後7日目及び14日目の3回、各区ともホールカッターで区内の芝草地を任意に3ヶ所ずつ抽出して、その中に生息する生虫数を調査する。必要に応じてそれ以後の調査を加える。

2. 表示方法

スジキリヨトウに準じて行う。

Ⅳ その他

気象条件（降雨など）土壌の種類等を記録しておく。

ケ ラ

I 試験実施時期および試験規模等

1. 試験実施時期

本種の発生は年1回だが、非常に不規則である。成虫または幼虫で越冬し、越冬成虫は5月頃芝草地の下に生息孔を作り産卵する。孵化当時幼虫は集団生活するが、生長すると単独となる。新成虫は7～8月にみられる。

活動は夜間で、昼間は地中に潜っている。成虫・幼虫が活発に活動する6～7月の特に雨上がりの夕方に試験を実施するのが望ましい。

2. 試験地の設定と準備

芝草地では含水量の多いところを好む。近年ベントグラス類の洋芝の使用量が急増し、ベントグリーンにおける被害が顕著なので、このような被害の多いところに試験区を配置する。

3. 試験規模と区の配置

(1) 1区の面積

1区の面積は少なくとも4～10m²（2×2m～2×5m）程度が望ましい。

(2) 試験区の構成と配置

原則として3区（連制）乱塊法配置とする。やむを得ず試験区が分離する場合は、1連の試験区ごとに分

離して配置する。

II 薬剤の施用方法

1. 施用時期

雨上がりの夕方が望ましく、生息孔を調査した後薬剤処理を行う。

2. 施用方法

液剤は、芝草の表面にジョロまたは加圧噴霧器で所定の濃度・散布量で散布する。粒剤は、手蒔きにより散粒後、液剤区と等量の水をまく。散布量が少ない場合は、砂で増量して散粒する。施用回数は原則として1回とする。

3. 対照薬剤

既登録薬剤のなかからそれぞれの地域の慣行を勘案して薬剤を選定する。

III 調査方法

1. 調査回数・調査方法

薬剤の性質によって異なるが、散布前・散布後3日目、7日目および14日目の4回、生息孔をマークしてその数を調査する。必要に応じてそれ以後の調査を加える。

2. 表示方法

スジキリヨトウに準じて行う。

IV その他

気象条件（降雨など）土壌の種類等を記録しておく。

シバネコブセンチュウ

I 試験実施時期および試験規模等

1. 試験実施時期

本種は比較的高温条件下（27～28℃）での繁殖が盛んなため、試験開始時期は4～8月の間が望ましい。

2. 試験地の設定と準備

あらかじめサンプリングし、センチュウが発生していることを確認した平坦な各種の芝草地に試験区を配置する。

3. 試験規模と区の配置

(1) 1区の面積

1区の面積は少なくとも2～4m²（2×1m～2m平方）程度が望ましい。

(2) 試験区の構成と配置

原則として3区（連制）乱塊法配置とする。やむを得ず試験区が分離する場合は、1連の試験区ごとに分離して配置する。

II 薬剤の施用方法

1. 施用時期

一般的に、散布後降雨があると防除効果が減るので、なるべく晴天の時を選ぶ。

2. 施用方法

液剤は、芝草の表面にジョロまたは加圧噴霧器で所定の濃度・散布量で散布する。粒剤は、手蒔きにより散粒後、液剤区と等量の水をまく。散布量が少ない場合は、砂で増量して散粒する。施用回数は原則として1回とする。

3. 対照薬剤

既存の殺センチュウ剤が有効と考えられるが、登録薬剤がない間はあえて設ける必要はない。

III 調査方法

1. 調査回数・調査方法

散布前・散布後30日目、60日目の3回、区の周辺部を避け直径10cmのホールカッターを用いて深さ0～10cmまでの根部を含んだ土壌を1区当たり3点サンプリングする。サンプルは篩等を用いて根部と土壌を分離する。

土壌はよく混和した後、ベルマン法（土壌20～50g、2～3反復、室温下で2日間分離）等によりセンチュウを分離して計数する。

根部は水洗いした後、フロキシンB水溶液に5～6秒浸漬させ、後水洗し、寄生する卵のう数を調査する（卵のうだけが鮮紅色に染め分けられ、調査が容易に行える）。

また、草勢の肉眼判定または生長量の計測を散布後適宜行うことが望ましい。生長量の調査は、単位面積（1m²以上）を一定高まで刈り取り、生葉の重量を計測して実施する。

2. 表示方法

ベルマン法によるセンチュウ数・卵のう着生数はスジキリヨトウに準じて行う。

生長量の調査はそのままの数値を比較する。

IV その他

気象条件（降雨など）土壌の種類等を記録しておく。さらに薬剤施用時の土壌条件（地温・土壌水分等）も記録することが望ましい。